

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 18 日現在

機関番号：32408

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2013

課題番号：22601008

研究課題名(和文) 横浜における異文化表象に関する研究とその展示・教育普及のあり方

研究課題名(英文) A study on representation of others in Yokohama: its exhibition and education programs

研究代表者

井上 由佳 (Inoue, Yuka)

文教大学・国際学部・講師

研究者番号：90469594

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円、(間接経費) 900,000円

研究成果の概要(和文)：横浜についての経済史、建築史、美術史における基礎研究は、横浜市内にある博物館、美術館等において、既に十分な蓄積が各分野でなされてきた。しかしながら、「横浜」の市民意識・アイデンティティや、国内メディアが創り出してきた「横浜」イメージといった、国内の社会・経済状況を視野にいれながらの社会的な読み解きは、これまでに行われてはこなかった。また、これまでの専門家による研究は、その成果を共有し議論する場が極めて限られていた。そこで本研究では横浜異文化表象研究会を立ち上げ、組織を横断するネットワークを築き、定期的に研究成果を共有する場を設け、その成果を2度のシンポジウムと展覧会を通して一般公開した。

研究成果の概要(英文)：There are a number of historical studies on Yokohama region, which focused on its economics, architecture and art history. Many museums in Yokohama have contributed in these studies. Since Yokohama being one of the main ports of Japan, its history represents a dynamic social change during the end of Edo and beginning of Meiji era.

However, not many studies have focused on the representation of others or other cultures in Yokohama during this period. As a port city, many Japanese images were created and exported through trading, and various other cultures were imported to Japan through Yokohama. In this research, we focused on tracking the change of images of Japan and other cultures which appeared in historical materials such as Ukiyo-e, Yokohama-shasin (pictures), and ceramics. The outcome of this historical research has been presented as a public exhibition and two symposiums. During the exhibition, we conducted a visitors' questionnaire survey to analyze their responses.

研究分野：時限

科研費の分科・細目：博物館学

キーワード：横浜 異文化表象 まちづくり 文化施設 ミュージアム

1. 研究開始当初の背景

横浜についての経済史、建築史、美術史における基礎研究は、横浜市内にある博物館、美術館等において、その開館から現在に至るまで、既に十分な蓄積がそれぞれの分野でなされてきた。それらの多くは、各館の紀要や企画展図録、書籍の形となっており、「横浜経済史」、「横浜建築史」、「横浜美術史」とも言える程である。そうした館所蔵の「モノ」や作品に関する基礎研究は、横浜が開港地であったことから、幕末・明治以降を対象とした、大学におけるそれぞれの史学研究の中心パラダイムと結びつく、ダイナミックさを潜在的に持ち合わせている。

しかしながら、その一方でこれらの歴史研究は、「モノ」や作品、古文書の存在を前提とするため、どうしても研究範囲がその周辺情報の域を超えにくく、また、各館の受益者が県民・市民であることから、県・市間の対象領域の境界、分野間の境界、対象時期(古代・中世・近世・近現代)の境界と、いくつものマトリックスが存在し、それぞれの学芸員・研究者がそのマスの一つに自らの研究を位置付けてきたため、総体としての横浜史、中でも「横浜」の市民意識・アイデンティティーや、国内メディアが創り出してきた「横浜」イメージといった、国内の社会・経済状況を視野にいれながらの歴史社会学的な読み解きは、これまで行われてはこなかった。

一方、横浜市は開港後に中華街が形成され、第一次大戦後には朝鮮半島の人が労働者として移住しきっていたという歴史を持つが、それらのいわゆるオールドカマーのさまざまな問題に対して、1980年代初頭以降、「内なる国際化」をスローガンとして解決に向けた動きが県・市ではじまったものの、1990年の入管法改正以降のニューカマーの増加に伴い、これまで以上に解決すべき諸課題が増加している。

世界的に見れば、古くからこうした「移民」は普通に生起している事象であると同時に、それに対する市民アイデンティティーの形成に「博物館」がなし得る社会的機能が存在することは、既に欧米の博物館学における常識である。しかしながら、現在の日本の博物館学のフロントラインでは、博物館の学芸員が館内における展示・教育普及のみならず、地域社会に飛び出し、「まち」の1プレイヤーとして、活動すべきという議論が散見されるようになったばかりであり、欧米の博物館学研究における「常識」とはまだ大きく溝がある。

とはいえ、欧米の博物館がそうした「移民」を包括する教育活動を視野に入れ始めたのはこの20年ほどであり、1980年代の新自由主義による貧富の格差がもたらした市民社会の断絶の危機がその背景にある。アジア・アフリカ・中近東から多様な「移民」がそれぞれのコミュニティで、継承されていく自らの「文化」とは別次元に、地域の「博物館」

が主流派市民のためだけの「博物館」であり続けることは現在ではもはや難しくなっており、多様な「文化」を市民の「文化」として包摂して、それらに「市民権」を与えながら、「展示」していくことは既に欧米では試みられている。欧米の博物館はいま、多様な「市民」の物理的・心理的なハブとしての機能を自らに課しながら、その限界がどのあたりかを模索しているのである。

2. 研究の目的

横浜の写真史の基礎の上に横浜の社会史的パースペクティブに踏み込んだものに、元横浜開港資料館研究員・斉藤多喜夫氏の著作『幕末明治 横浜写真館物語』(吉川弘文館、2004年)がある。本研究のために結成した「横浜異文化表象研究会」(以降、「研究会」)に同氏が研究協力者として参加したことから、同書記載の、横浜が異国憧憬の二重性(欧米から見た日本イメージ、日本から見た欧米イメージ)が存在する土地であるとの把握を、研究会の基本的なパースペクティブとし、これを文化人類学や社会学の知見から補強した。

研究会では第一段階として、国内における「横浜イメージ」はどのように形成されたのかを社会史的に把握することを目的とした。

詳細に述べれば、これは日本社会に内在する、「西洋」の代理地である「横浜」という土地へのイメージがいつ頃、どのようにどのような形で形成されたのかを明らかにすることであった。それには、幕末期の「横浜」の「悪所」や、明治初期に制定された違式註違条例以降の「横浜」の中央部である「関内」と「関外」における「公」的領域・「私」的領域の住み分け、その後の「私」的領域の拡大という歴史地理学的な把握をまず行い、それを基盤に大正期、横浜に居住した耽美主義の文学者谷崎潤一郎による文学・映画上のエキゾチズムの流布、その舞台としての横浜山手や、戦後の、混沌として危険な「アジア」につながる横浜「港」、1970年代以降の本格的な大衆消費社会の中で「西洋イメージ」の消費先として捉え直された横浜山手・元町の影響などを検討し、それらを「歴史」として組み立てる必要があった。

第二段階においては、前近代・近代の欧米から見た「日本」イメージと「横浜」がその形成に与えた影響を明らかにすることを目的とした。

サイド「オリエンタリズム」は、その告発とでも言える発表から、人文・社会科学の諸分野に多大な影響を与えたが、「日本」は分析の対象外であった。19世紀末のジャポニズムをどのようにみるべきかについては、すなわち、同時期の欧米からの日本文化への礼賛の背景にどのような認識の枠組みがあるのかは、その前史から丁寧に読み解いていく必要があった。しかしながら、欧米社会に現存する膨大な「日本」に関する著作群を分析

することは、本研究がなし得るものではなく、また、本研究における「イメージ」の分析とは、具体的な画像とそれに結びつけられた当該社会における意味や価値の読み解きを意図するものであったため、それらの著作の分析は、イメージの読み解きを補強するために行うものとした。

ジャポニズムの前段階として、前近代の西洋社会においては、「アジア」イメージと「日本」イメージは混濁していた。しかし、それが故に西洋の絶対君主やその親族や貴族たちは、現実とは関係なく、自らに親和的・近似的な「アジア」イメージを勝手に描き、それらをオランダ東インド会社を通じて、中国（景德鎮）・日本（有田）に陶磁器・漆器の絵柄として、制作させていたことは、本研究の基盤として、国内有数のヨーロッパからの里帰り品を所蔵する佐賀県立九州陶磁文化館の展示により把握していた。また、ジャポニズム研究のフロントラインにおいても、シノワズリとジャポニズムとの関係性について取り上げられるなどの動向があり、そうした動向を視野に入れながら、陶磁器などの調度品に絵付けされた多様な「アジア」の草花・人物画の中でも、特にアジア認識がいかなるものであるかを特定することのできる「人物画」が何であるかを特定することを目的に、絶対君主や貴族の宮殿やその調度品が現存する美術館・博物館において、調度品を実地調査することとした。

これらの前史を明らかとすることで、中国・インドが西洋列強に植民地化されながらも、「日本」(イメージ)が愛好されていたこと、そのイメージの輸出地である「横浜」の役割を明らかにすることが、世界史的に見て同時期の「横浜」とは一体何であったのかを位置付けることにもつながると想定された。

これら、第1、第2の目的は、最終的には日本において、近い将来の「博物館像」としての欧米の博物館の行く末を見定めながら、横浜の博物館に存在するさまざまな「境界」を超えつつ、横浜の史学研究の基本的な蓄積の上に「横浜」アイデンティティー・「横浜」イメージの歴史的輪郭を描くためのものであり、われわれ(横浜市民)とは何であるか、横浜の気質、「横浜」という空間に何世代かにわたって継承されてきた「ハマらしさ」を明らかにすることでもある。同時に西洋社会から見た「日本」イメージの歴史的形成に「横浜」が果たした役割を世界史的(文化交流史)に位置付けることは、横浜及び横浜の博物館が果たしうる可能性を検討することになると想定された。

3. 研究の方法

横浜市内の博物館・美術館・図書館には開港以降の古写真・錦絵・古文書等を収集し所蔵しているが、研究会はこれらを研究対象とした。それは古文書の読み解き、作品・作家分析だけでは、従来の基礎研究の方法と同様

の結論しかもたらさず、そうした限界を超えて史学領域を横断できるようにするため、欧米において近年、研究が進んでいる「ビジュアル・カルチュラル・スタディーズ」の手法や記号論における「間テクスト性」をイメージ研究に援用する手法を用いた。

そして、もう一つの研究テーマとして、研究成果を教育普及の視点を生かした展示・展覧会として取りまとめ、公開し、その効果を評価する試みについても進めてきた。今回は2回目のシンポジウム会場にて、ミニ展覧会という形で、上記の第二段階で明らかとなった美術表象史の知見をまとめ、発表した。

展覧会には2点の実物資料の他、約20枚の解説パネルを設置した。この解説パネルを作成する際も、表象史の研究者の視点と博物館・美術館における教育普及担当者の視点の双方を取り入れ、観客の「知的な変化」を起こすことを目標に展示の共同制作を試みた。ここでいう「知的な変化」とは、展示に対して楽しい、つまらないといった感情的な反応だけではなく、もっと知りたい、さらに詳しく聞きたいなどの知的な行動につながるような変化が見た人々の中に生まれること、と定義した。

1990年代以降より、欧米のミュージアムでは、キュレーターと呼ばれる学芸担当とエドゥケーターと呼ばれる教育担当の両方が、展示の企画段階から意見をぶつけ合い、アクセシビリティ(accessibility)を高め、より多くの人々に享受されることを目的として、チームとして展示を作る動きが出てきている。しかしながら、日本においてはエドゥケーターの専門性を認め、職員としてポジションを用意して雇用しているミュージアムがほとんどないことなどから、海外で知識と経験を積んだエドゥケーター等が日本のミュージアムで活躍することが極めて稀であるという現状である。

そこで本研究では、小規模である点を活かし、研究担当者と教育普及担当者がミニ展覧会を共同作成するにあたり、企画の段階から話し合い、展示の構成やデザインなどを決め、公開するまでのプロセスを実行し、検証を試みた。と同時に、この展覧会を見学した人々の間で「知的な変化」が起きたのかどうかを、見学前と見学直後に記入してもらったアンケート調査票の結果より分析を行った。

4. 研究成果

これまでの研究成果を三点に分けて述べていきたい。

第1点においては、横浜市内の各所を撮影した横浜写真や、戦後の女性誌や映画において、頻繁に掲載・撮影される場所が存在していることは、既に「観者」において、その意味を了解していることを前提にしていることが示唆された。たとえば、横浜山手の外国人墓地を墓地前にある歩道からアングルを構えた写真や場面は、何度となく、日本のメ

ディアにおいて繰り返されてきた画像であり、これが紙面や画面に出てくるやいなや、これから「横浜」のはなしや場面が始まると瞬時に「観者」に理解させる同時に、「外国に開かれた横浜」、すなわち、異国憧憬の情感を「観者」の内面ですばやく「復習」させ、強化されるのである。また、夜の横浜港にある倉庫群の場面と汽笛の音は、その場面と音が観者の目と耳に入った瞬間に、これから危ないシーンが始まると「観者」に理解させると同時に、「外国人」(特にアジア)とは「犯罪に拘わる」ものであるとすばやく「復習」し、強化されるのである。

こうした「横浜」イメージの読み解きは、大正期に入ってきた映画だけでなく、それ以前の日刊新聞の小説の挿絵にも適用することができ、たとえば、明治・大正期の日本社会に内面化された「洋館」の挿絵は、外国人貿易商の日本人妾の存在をもの悲しさとともに暗示している。

こうしたメディアに何度も使用される「横浜」の各地の場面は、それが使用された時代の日本社会の「横浜」へのイメージを暗黙裏に語っているのであり、これらを歴史的に跡付けすることで、その変遷を一定程度明らかにすることができた。

第二点としては、ヨーロッパの6都市(アムステルダム・ベルリン・ドレスデン・パリ・ナント・ロンドン)の宮殿・美術館・博物館等において美術工芸品や建築物・構造物に付された「アジア」イメージ、「日本」イメージの同定を行った。その手法は第一段階で用いた方法と同じく、何度も反復して調度品に使用される図柄(「人物画」)は何であるのかを特定し、どのような部屋・場所の調度品であるのか、その部屋の主人はどのような嗜好の持ち主であったのかなどの情報をその特定の裏付けとするものである。「図柄」はその主人が嗜好する「アジア」イメージもしくは、それに紛れ込んだ「日本」であるが、第一段階と大きく異なるのは、持ち主と制作者が同じ文化圏に属していないため、異文化理解ならぬ「異文化誤解」が多く生まれていることである。

たとえば、前近代の西洋社会においては、「日本」のキモノを着た女性をかたどった磁器は、赤や白の鮮やかな衣服を着ていることから「高貴」な身分の女性像と了解してしまうが、同時代の日本社会においては、自らを売り込むため、自らを特徴付けした「芸者」の像であったりする。西洋の絶対君主らによる、自ら嗜好し、自ら了解可能な範囲での「アジア」「日本」イメージの消費は、相手側の社会的・歴史的な文脈とは切り離された、あくまで造形のみに着目した審美眼によるものであることから、こうした「差異」を明らかにすることも、近代のジャポニスムにおける「横浜」の役割を明らかにすることにつながった。

そして第三点の展覧会の研究者の視点と

教育普及担当者の視点の双方を取り入れた展覧会の共同制作のプロセスとそれを見た見学者の「知的な変化」を呼び起こすことが出来るかどうかの評価について、その成果をまとめたい。

共同制作については、研究担当者と教育普及担当者が対等な立場で発言し、それを形にしていくことを認めていく環境が必要であることがわかった。そのためにはミュージアムを舞台とするならば、館全体の理解が不可欠である。これまでは研究担当者(学芸員等)の声の方が重視されてきた風潮があるが、双方の声を認めていくことが、これからの展示作り求められるであろう。今回の共同制作では、これを実現するためには対等に議論できる土壌があること、十分な時間的余裕を確保すること、最終的に展示で何を伝えたいのかを明確にし、制作のプロセスでそれに何度も立ち戻ること、などが必要であることが明らかとなった。

見学者の知的な変化については、アンケート調査の結果より、美術史へのイメージに変化が生まれたこと(例:見学前の回答:「専門外」見学後の回答:「異文化交流論について考えるヒント」)が明らかとなった。回答数が21名と少なかったため、この結果を一般化することは難しいが、回答の内容分析をすると、美術史に対するイメージが展覧会を見た後はより具体的なものとなっていく傾向が見られた。

次に展覧会への理解を見るために、「今回の展覧会を家族や知人に説明する場合、どのように説明するか」という設問への回答を分析したところ、「面白いもの」「興味深いもの」という単純な回答よりも、「日本側と異国側の両方の目線を知ることが出来る展覧会」「欧州におけるアジア・日本イメージを紹介する展覧会」等の内容に言及する記述が多数見受けられた。自由記述ではなく、このような設問を設定することで、見学者が自分の言葉で展覧会を通して何を理解したのか、またどのように考えたのか具体性を持って記述されることがわかった。これらの知見は今後の来館者研究ならびに展示評価といった博物館学の研究の礎となるだろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 4 件)

野呂田純一「第2セッション『西洋』イメージの発信地としての横浜:研究報告」
横浜異文化表象研究会 平成24年度8月26日

井上由佳「大英博物館における日本表象と教育プログラム」シンポジウム&展覧会「日本・欧州における異文化表象 前

近代～現代の異文化理解と異文化<誤解>」横浜異文化表象研究会 平成 26 年 2 月 23 日

野呂田純一「欧州におけるアジア・日本イメージ」シンポジウム&展覧会「日本・欧州における異文化表象 前近代～現代の異文化理解と異文化<誤解>」横浜異文化表象研究会 平成 26 年 2 月 23 日

井上由佳、野呂田純一、鈴木智香子「美術史の知見を人々に伝える試み:横浜異文化表象ミニ展覧会を事例に」第 36 回美術科教育学会奈良大会、平成 26 年 3 月 30 日

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

井上 由佳 (INOUE, Yuka)

文教大学・国際学部・専任講師

研究者番号：90469594

(2) 研究分担者

椎野 信雄 (SHIINO, Nobuo)

文教大学・国際学部・教授

研究者番号：50206041

(3) 連携研究者

()

研究者番号：